

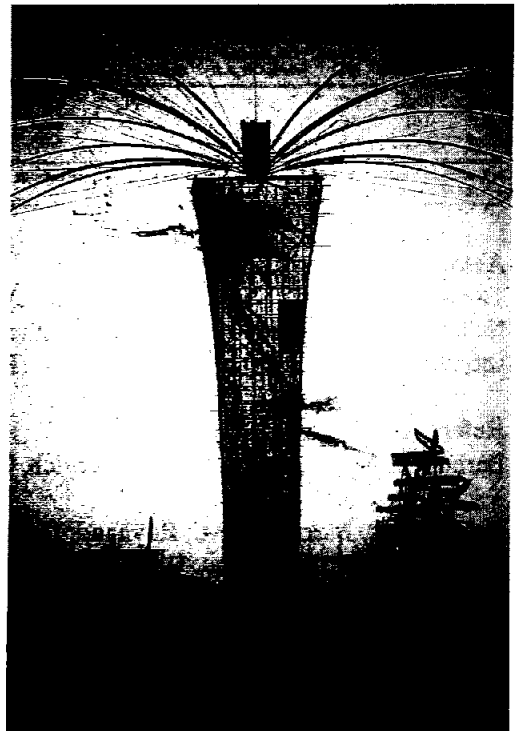
運動のある空間作品の制作について 『海市』展のための作品から

芸術学系 鶴 沢 隆

『海市：もうひとつのユートピア』展とは、新宿のNTTインターコミュニケーションセンター（ICC）のオープニング記念展として企画された展覧会である（1997年4月19日－7月13日）。多数の建築家たちが参加して、新たな都市的イメージが模索されたこの展覧会の企画は、建築家の磯崎新氏によって提案されたものであるが、その企画にはふたつの特徴的な実験が盛り込まれていた。ひとつは、模型（1/500）とコンピュータ・グラフィックスを駆使した展示が会期中に日々変化する、新たな都市「生成」の実験的プレゼンテーションであり、もうひとつは、多数の建築家やアーティストによる、ひとつの都市的「連歌」を形成する、同一の場での継続的な空間的提案であった。つまり、展覧会を見る者にとっては、訪ねる日時によって目撃されるものが異なることとなり、そこで作品を発表する者にとっては、それぞれの担当時期のスタート時点でその都市空間が予測不可能な状態の中で空間的提案を行なわなければならないという、ある種の「偶発性」が秘められていることであった。私が展示を要請された「ヴィジターズ」のセクションはそうした特徴を最もストレートに表明する場となったが、ヴィジターズとして招待されたのは、12人の建築家やアーティストであった。それぞれが1週間の展示（制作自体も公開される）を担当するが、私は8週目の担当であり、その前の7人の作家の空間的提案の堆積を前提として、そこに「何を」付加し、それを「如何に」変容させるかが問われたプロジェクトであった。

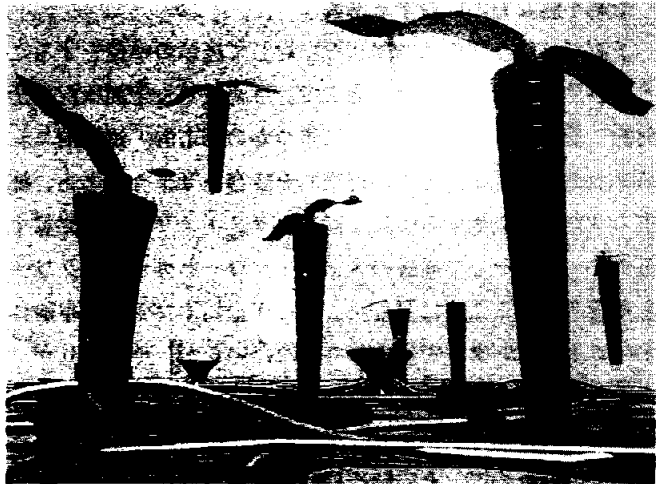


1. 都市へのイメージ・スケッチ

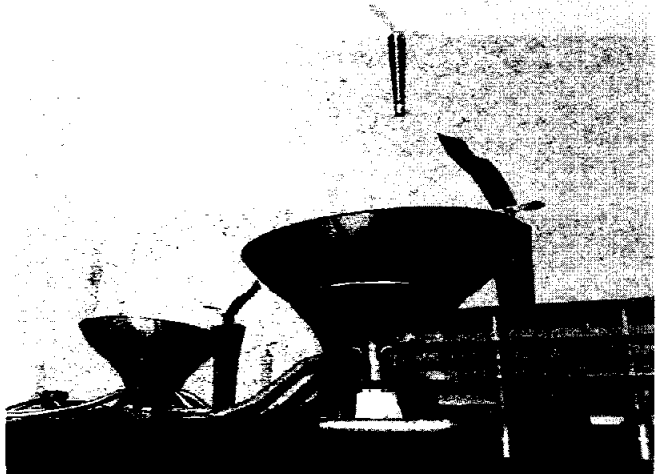


2. 隠蔽的なメタル・タワーのスケッチ

3. CG. 林立するメタル・タワーと
ガラス・タワー



4. CG. フローの巨大な器



5. CG. フローを象徴する液体



予測不能なものに対する準備

予測不可能な都市的空間状況に対して展示の準備をすることは容易なものではない。そこで、与えられた空間状況を全面的に受け入れながら、そこに幾つかの都市的・建築的エレメントを付加することで都市空間を変容させようと考え、都市のフローを象徴する巨大な器（ガラス+メタル）と錯綜するチューブ、そして高層のメタル・タワーとガラス・タワーを多数準備することにした。これらの空間オブジェを事前にすべて工作センターで試作していただいたが、それぞれがフローを象徴する「液体」の循環や、タワー最上部に取り付けられた巨大な翼による空気の流動といった「運動」が組み込まれていたために、その制作には精度だけでなくメカニカルなシステムの解決が求められた。極めてタイトなスケジュー

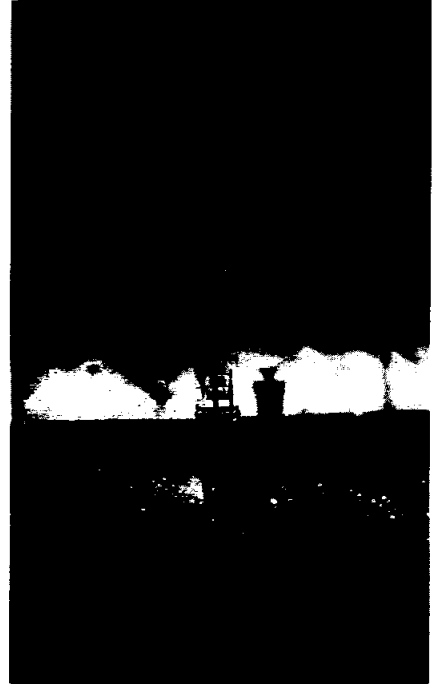


6. 錯綜した都市空間に林立する空間オブジェ

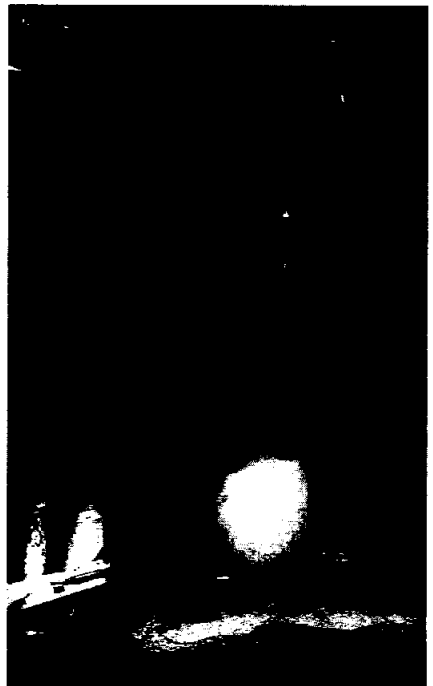
ルの中での制作であったが、多数の人々の協力によって、私の空間モデルは緻密な建築模型として実現した。

生成から死滅へのプロセス

展示会の8週目にはすべての準備は完了していた。しかし、この展示会が「都市の生成」をひとつのテーマとしていたことから、私はそれらの空間オブジェを「都市」に一举に展示するのではなく、前半の4日間の中でそれぞれを暫時付加し、そして後半にはそれらの空間オブジェが「都市」から遊離して、7日目にはすべてが「都市」から浮遊した空間のイメージを表現した。7日間の中で、私は「都市」の生成から死滅へのプロセスを象徴的に空間化することを試みた。これらの作業は、『海市：もうひとつのユートピア』（NTT出版 1998年 pp.229-256）に記録されている。



7. 内部が露出したガラス・タワー



8. 「都市」から浮遊し始めた空間エレメント